

書 評

竹内二士夫・粕谷 大智・佐々木清子 著

図説リウマチの物理療法—病院での治療から自宅療法まで

粕川 禮司（福島県立医科大学第2内科）

「図説リウマチの物理療法—病院での治療から自宅療法まで—」を読ませていただいた。

本書が扱う慢性関節リウマチ患者は全国で50万人おり、関節の破壊と変形により身体障害を起こしやすい病気です。治療法としては服薬や注射などの薬物療法が中心ですが、温熱療法やマッサージ、体操などのリハビリテーションも大事な治療法です。時には手術療法も必要になる総合治療が行われます。リハビリテーションは病院で行うばかりでなく、自宅で毎日行うことが大切であり、より効果があるものです。このような家庭で行う運動療法や温熱療法について書かれた書物は意外と少ないのです。

本書は、東大病院の内科物理療法学科で関節リウマチ患者のリハビリテーションに直接当たっている理学療法士粕谷大智氏と患者の看護を担当している佐々木清子看護婦長、および、リハビリテーションを指導している竹内二士夫医師との共著になる実践的ガイドブックです。

タイトルに“図説”とあるように、リウマチ体操や温熱療法の実際が図解で示されていて、わかりやすく書かれています。本書の特徴は、関節リウマチを4つの病期、初期・早期・進行期・晩期に分けて、ホットパックの使い方やマッサージの部位、リウマチ体操の仕方などが、手・膝などおかされた部位毎に、ていねいに書かれていることです。それも2週

間単位のメニューとして治療計画が組まれているので、患者さんやその家族も、まず2週間はやってみようという気になります。リハビリテーションは、やろうとする気持ちを持つことと、それを続けることが大切です。この辺に著者らの意図がうかがわれます。

リウマチ体操やマッサージは、1回何時間で、1日何回やったら良いか、ホットパックを温める鍋湯の温度は何度が良いかなど、すぐに実行できるよう粕谷療法士が加わり具体的に書かれているのも利用しやすい点です。

膝が腫れていて、その場所に熱がある時に、冷やしたほうがよいか暖めたほうがよいか、温熱療法はやったほうがよいか止めるか、首に痛みがある場合、頸の体操はどうするかなど、治療法に迷った時のアドバイスを竹内医師が注意点として書かれています。保温のための服装やサポーターの選び方、食事、入浴、履物、適度の運動、自助具など、佐々木婦長の記述は患者自身や家庭での介護者に役立つ内容です。

このような内容から、本書は、患者とその家族、理学療法士、作業療法士、鍼灸・マッサージ師、看護婦、保健婦、リウマチ診療医など多くの方々に一読をすすめることができる一冊です。

(B5 頁128 定価(本体3,500円+税) 1998 医学書院刊)